

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 19日現在

機関番号：32664

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520204

研究課題名（和文）高度成長による文学と文化の変容—中国との比較を視座として—

研究課題名（英文）Literature and cultural transformation by high growth: As compared with China Perspective

研究代表者

瀧田 浩 (TAKITA HIROSHI)

二松学舎大学 文学部 准教授

研究者番号：30299888

研究成果の概要（和文）：本研究の具体的な成果として、研究分担者石川巧の著書『高度成長期の文学』（2012年、ひつじ書房）がある。本書にあるように、高度成長期における大衆の欲望は不可逆に変容し、文化もこれに伴い大きく変わった。私たちの研究は、この変容のプロセスを、文学を中心としてサブカルチャーまで領域を広げながらも、その変容を学術的・具体的に検証するものであった。中国の現在の高度成長と比較する視点が加えられ、本研究は他の研究には見られない独自のものとなった。

研究成果の概要（英文）：As concrete results of this study, there is "Literature of the period of high growth" (2012, Hitsuji Shobo) book of Takumi Ishikawa (research division). As shown in this document, the desire of the masses in high-growth period is transformed into irreversible, has changed greatly due to this culture. Our research, was not to broaden the scope of sub-culture but as a literary center, verified academically and concretely the process of this transformation. Perspective compared to the rapid growth of China's current is applied, our study has be unique and not found in other studies.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：日本近代文学・文化研究

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：高度経済成長・大衆・文化変容・欲望

1. 研究開始当初の背景

平成20(2008)年の夏には、北京オリンピックが開催され、2年後の平成22(2010)年には、上海で万国博覧会が開催された。日本で東京オリンピックが開催されたのが昭和39(1964)年で、大阪で日本万国博覧会が開催されたのが昭和45(1970)年だから、中国

の高度経済成長を世界に発信する象徴的な国家規模のイベントは、日本に40年ほど遅れて行われたことになる。

日本の高度成長期と中国のそれを比較研究するといっても、もちろん両者は同じではない。隔たる40年のあいだに、米ソ冷戦は終わり、経済・金融のグローバル化は進み、

日本と中国の高度成長が質を異にしていることは言うまでもない。にもかかわらず、私たちがこの研究課題を取り上げようと考えたのは、日本の高度成長期における文化が研究対象として確立されておらず、単眼的な郷愁や呪詛の対象となるばかりであるからだった。豊かな現代を生きる日本人が拠って立つ、精神的・物質的な基盤を客観的・相対的に分析することが出来たならば、そこから得られる収穫は計り知れないほど多いであろうと考えたのである。

当時、日本において中国は負のイメージに取り巻かれていた。最も多く語られていたのは食品の安全性の問題であるが、全体として中国の経済的な成長や文化的な発展を肯定的に評価する声はあまり聞かれなかった。

日本の高度経済成長の終焉を物語る最も象徴的な出来事を「公害」と考えた時、中国における食品の安全性をめぐる問題の浮上は、高度経済成長を目的としてきた中国がいよいよ、その負の面と向かい合い、高度成長至上主義から方向転換をするべき時期が到来したことを意味していたとも考えられる。

上海万国博覧会のテーマは、「より良い都市、より良い生活」であり、5つ掲げられている副テーマのすべてに「都市」が含まれている。中国が成熟した国家となるためには、経済発展至上主義から距離をとった都市の再生が不可欠となってきたのだ。

日本と中国を、それぞれの高度経済成長期の文化を対象として研究しようとする姿勢は、他にほとんど例を見なかった。日本映画「ALWAYS 三丁目の夕日」(平成17[2005]年)に代表的に見られるように、当時、そして現在にあっても、日本の高度成長期は主として「古き良き時代」として回顧されていることが多く、逆に研究の世界においては禍根ばかりが強調される忌むべき時期とされることが多い。

私たちの研究の目的は、隔絶したものとして扱われている日本と中国の高度成長期を、文学研究・文化研究を通して架橋し、文化発展と経済成長の関連を客観的にあぶりだすことであった。グローバル化時代に生きる人間の問題、格差社会という問題は、日中の壁を越えて共有される問題である。私たちの研究はこのような問題に対して、解決の示唆を提供しえるのではないかという自負のもとに出発したのだった。

2. 研究の目的

平成20(2008)年9月に私たちのメンバーが中国でおこなった第2回「中日高速経済成長期の媒体と表現学術研究会(中日高度経済成長期のメディアと表現シンポジウム)」は、私たちの研究の指針を示すものであった。4人のメンバーそれぞれの発表題目は、以下の

通りである。

藤井淑禎「高度成長期の読者と読書」、渡邊正彦「『集団』から『個人』へ」、石川巧「高度成長期における〈日本回帰〉」、瀧田浩「日本児童漫画の変質と中国の漫画政策」。

渡邊と石川の発表は高度成長にともなう共同体意識の変容について考察し、藤井と瀧田の発表は文学作品や漫画の提供・受容をめぐる考察であった。

日本と中国に共有される文学・文化の様相をめぐる分析を通して、あきらかにしようとしたのは、第一には文化変容を共同体との関係であり、第二にはその具体的な局面である。前者においては批評的なスタンスからのアプローチが、後者においては社会学的、あるいは統計論的な分析を用いることが考えられた。私たちの目的は、マクロ的な視点に立った確実性の高い仮説を示すことと、ミクロ的な具体的かつ実証的な調査結果を手にする事だった。

継続的になされてきたこれまでの私たちの研究は、日本の文化現象と中国の文化現象の対応的/対照的關係をいかに(断片的に)見出すかに力を注いできた。しかし、中国における日本文学・日本文化の受容のありかたについてシンポジウム等を通して理解してきた私たちの研究には、中国の成長のほぼ全過程を射程にして論じる可能性が開かれているとも考えられる。

北京オリンピックを経て、2010年には上海で万博が開かれた中国の高度成長の様相は、ほぼ40年前にオリンピック・万博を経過した日本のそれと相対化、さらには俯瞰して論じうる時期が来たと考えられることができる。共同研究のメンバー3人は、上海万博を見学し、パビリオン内や万博会場全体の構成、さらには入場している数多くの中国人の文化受容のあり方を見てきた。

資料にあふれる日本の高度成長期を相対化して考察するために、中国の歴史や文化、さらには実地に経験したことをふまえる。このようにして、日本の高度成長期の文化の実態を歴史的かつ相対的に明らかにできるはずである。

共同研究メンバー個々の研究の目的を以下に示しておく。

代表者の瀧田浩は、日本と中国の高度成長期における、大衆の欲望が直接的に反映されやすいメディアであるマンガや大衆音楽が国家の動向とどのような関係にあったかの解明をめざす。

研究分担者の渡邊正彦は、国家に対する大衆の複雑な内面性をふまえた上で、高度成長期における負の面を日本と中国の批評家がいかに射程となしえたかを分析する。

石川巧は、日本の高度成長期に登場したさまざまな大衆の欲望が表現された文学や文

化現象を取り上げ、「個」の表現から「機構の力学」の表現へと変移する文学の様相の解明をおこない、また、「人類」をキーワードとして含む万国博覧会のイデオロギー性を日中比較の視点を盛り込みながら考究する。

(もうひとりの研究分担者である藤井淑禎については、途中で共同研究から離脱したために、記さない。)

3. 研究の方法

3年間の研究の進展を説明しながら、記述する。

初年度の21年度においては、これまでの課題を深化・発展させる課題に応じた資料の収集と分析・考察に向かった。個人的なデータ蓄積と分析結果は、メール添付ファイルで活発に交換しあい、ある程度の議論にまで発展させた。さらに、1年に4回、ほぼ3ヶ月に1回の研究会を開催した。

幸いなことに、メンバー4人の勤務大学はいずれも東京都内にあり、交通の便は良いから、研究会の開催場所に困ることはなかった。ほとんどが立教大学を研究会の場所と設定することが多かったが、何度かの研究会を重ね、おのおのの研究の可能性や問題点を率直に指摘し合い、開かれた研究をめざした。

共同研究の計画と方法を説明するならば、研究の進捗状況についての情報交換は、代表者瀧田が中心となって定期的に進めた。これまで高度成長期の文化現象・文学作品について数多くの研究を積みかさねている藤井は研究の柱であるから、研究が停滞した場合などの対応は藤井の知見の力を借りた。

平成22年度においては、上海万博を共同研究のメンバー瀧田浩・渡邊正彦・石川巧の3人で見学した(藤井淑禎は本年度から研究分担者から離れた)。北京オリンピック終了後、世界同時的に巻き起こった金融危機の中で、中国の経済も深刻な不安に見舞われている中、上海万博を中国の民衆がどのように受けとめ、体験するのかに、私たちは関心をもって、見学したのである。

元来が文学や文化を社会・経済の側面も視野に入れつつ研究するのが、本研究であるから、社会・経済的状况を実地に体験することに大きな意味があるのは言うまでもない。私たちは、上海万博の各パビリオンの展示内容やパフォーマンスの内容を見ることよりも、むしろ会場おける見学者たちに目を向けた。

上海万博を見学するのはほとんどが中国人であり、彼らは文化体験のマナーを身につけないままに、またその展示やパフォーマンスの文化的洗練度を顧慮することなく、文化的イベントに熱中していた。このような実地的な知見によって、私たちは日本の高度経済成長期を改めてとらえ返すことが可能になったのである。

3年目となる平成23年度においては、意見交換と研究会は1年目と同様に進めたが、同時に研究成果の公開をめざした。前採択課題の成果を『高度成長期クロニクル』(2007)にまとめたが、これと同様にできれば単行本としての出版に向けて、努力を進めた。しかし、現在の厳しい出版状況の中で、単行本の形での発行は難しいと判断し、私たちは定期刊行物の特集という形で、他の研究者の知見と合わせて、研究成果を世に問うことにした。

4. 研究成果

本研究の重要な成果として、研究分担者である石川巧の著書『高度経済成長期の文学』(2012年2月、ひつじ書房)が上梓された。知性・大衆・欲望・事件・教化の五つの章に配置された15本の論文が、私たちの共同研究の深まりと成果を雄弁に語っているだろう。煩を厭わず、全ての論文のタイトルを記しておく。ここに、高度成長期の文学そして文化の相貌がかなり多面的に記述されることが理解されよう。と同時に、私たちの研究の文学に限定されない、時代そのものをあぶりだす種類のものであることがここに読み取れよう。

第一章 知性—学生小説の変容

第一節 モラトリアム文学のはじまり—柴田翔『されどわれらが日々—』論

第二節 〈知性〉の変容—庄司薫『赤頭巾ちゃん気をつけて』論

第三節 子規との対話—大江健三郎「他人の足」論

第二章 大衆—身につまされる文学

第一節 原爆とエロス—川上宗薫の自伝的小説をめぐって

第二節 〈金の卵〉たちへのエール—松本清張『半生の記』を読む

第三節 戯画としての合戦—吉川英治『私本太平記』論

第三章 欲望—愛欲の光景

第一節 妻たちの性愛—川端文学の水脈

第二節 悶々とする日々への復讐—清張ミステリーの女たち

第三節 同棲小説論—アパートのある風景

第四章 事件—終末の記憶

第一節 三島由紀夫の死をめぐり—考察—『川端康成／三島由紀夫 往復書簡』を読む

第二節 万博と文学—〈人類〉が主語になるとき

第三節 吉永小百合という記号—〈夢千代日記〉を読む

第五章 教化—教材化される文学
第一節 〈私〉探しの文学—太宰治の読まれ方

第二節 ヒューマニズムとコスモポリタニズム—教育言説のなかの有島武郎
第三節 詩の反逆—辻征夫論

急速に経済発展する中で、戦後に求められた自立した市民という理想像は、大衆の欲望に呑み込まれていく。大学生の知の先鋭化や国家の指針と結びついた教科書の戦略も、最終的には時代の大きな欲望のありようを示していたと考えることができるだろう。

私たちの研究は、中国の現在との比較という点、またサブカルチャー的な視点をとりいれるという点においては十分な成果を残すことはできなかったが、日本における文化現象を高度経済成長期という観点から具体的にかつ学術的に研究したという側面においては、一定の実績をあげたと考えられるだろう。

共同研究メンバーにより 2007 年に共著として上梓した『高度成長期クロニクル』に続く 2 冊目の著書に代わり、研究分担者の石川巧が同人となっている定期刊行の学術誌『紋説』において、高度経済成長期の特集を組むことになった。原稿依頼者の検討などを、本メンバーでおこない、私たちの共同研究をさらに広い文化的な側面に広げ、今後の文学研究・文化研究に寄与したいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

1、石川巧「松本清張の武蔵野」(『武蔵野文学館紀要』2011 年、創刊号、79-104 頁、査読無し)

2、石川巧「雑誌「四国春秋」解題と総目次」(『日本文学論叢』2011 年、第 11 号、177-241 頁、査読無し)

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 1 件)

石川巧『高度経済成長期の文学』(2011 年、ひつじ書房、全 564 頁)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

瀧田 浩 (TAKITA HIROSHI)

二松学舎大学・文学部・准教授

研究者番号：30299888

(2) 研究分担者

藤井 淑禎 (FUJII HIDETADA)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：30132252

渡邊 正彦 (WATANABE MASAHIKO)

玉川大学・リベラルアーツ学部・教授

研究者番号：40259065

石川 巧 (ISHIKAWA TAKUMI)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：60253176

(3) 連携研究者

()

研究者番号：